

紀州名手市場妹背佐次兵衛家の系譜と塋域

——華岡青洲の妻加恵に関連して——

松 木 明 知

日本医史学雑誌第四十六巻第二号 平成十一年五月二十四日受付
平成十二年三月二十日発行 平成十二年十月十六日受理

〔要旨〕 華岡青洲の妻加恵の系譜に関して何の研究もなされていない。加恵は現在の那賀町、名手市場の妹背佐次兵衛家の出である。この家族の直系の子孫は行方不明であり、菩提寺である安養寺も火災で焼けたため過去帳も失われている。著者は名手市場の俗に城山にある妹背家の塋域を実地に調査した。妹背家の墓地は三ヶ所であるが、佐次兵衛家の墓地は城山の東側にあり、十七の墓碑と一墓の石灯籠が存する。碑文の大半は風打雨蝕のため解説が困難である。最古の墓は「明白重翁居士」で一七〇六年八月九日に死亡した初代の佐次兵衛と目される。一七三〇年一月九日に歿した「利重」を名乗る人物が二代の妹背佐次兵衛と思われる。妹背家の言い伝えによれば、加恵は三代佐次兵衛の娘であるというが、今回の墓碑の調査で、それを証明することは出来なかった。

キーワード——妹背佐次兵衛、華岡青洲、加恵、妹背家

はじめに

著者は二十数年来華岡青洲に関して、麻醉科学、麻醉科学史の立場から「麻沸散」の実験的研究^(2,3,4)や青洲の手術に関する研究を行っており、さらに系譜的研究⁽⁵⁾として従来不詳とされた青洲の同胞の一人、子女の一人の俗名、法名、歿年月日などを明らかにしてきた。

青洲の業績を考えると、その背景に家族の存在が非常に大きな意義を持っている。例えば青洲が若年時京都で修行中の学資の一部は妹のお勝や小陸が機を織って得られたとされるし、また青洲の業績中最大といわれる麻沸散の開発に際しても、青洲の母於継と妻加恵の献身的貢献があったと伝えられている。

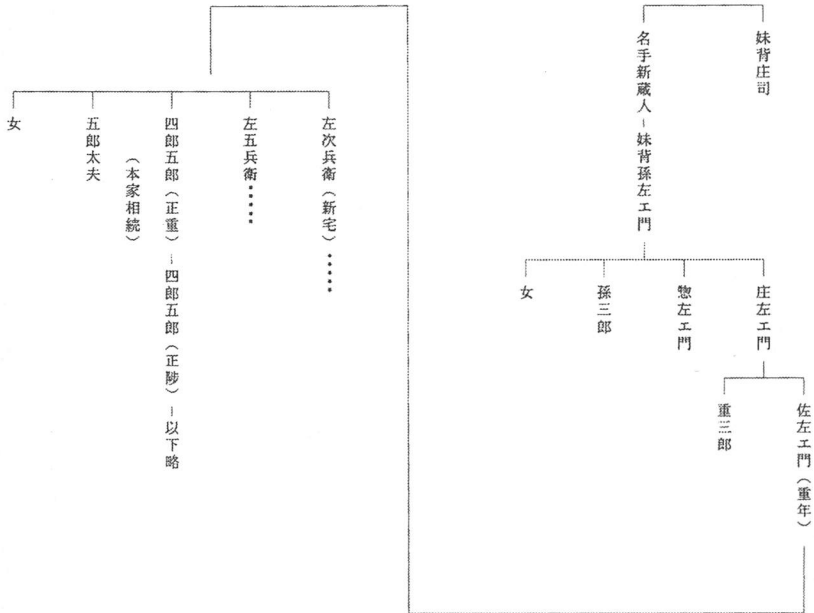
従来の系譜的研究においては、対象は華岡家側に偏っている傾向が見られることは否定出来ない。例えば呉秀三⁽⁶⁾は『華岡青洲先生及其外科』の中で、青洲側の系譜に詳細に言及しているが、三代隨賢の青洲の妻加恵については、「先生ノ妻君妹背氏（宝暦十年—文政三年）ハ紀州上那賀郡名手市場村豪士妹背佐次兵衛ノ女ニシテ名ハ加恵ト云ヒ。先生ト同年令ニシテ。宝暦十年ニ生レ、先生ニ嫁セシ時代ハ明ナラザレドモ、第一子ノ生レシハ寛政元年ナレバ、天明七八年ノ頃（時二二八九歳）先生ガ京都ヨリ帰郷セラレシ年ノコトナリ」としか記していない。森慶三⁽⁷⁾らの編になる『医聖華岡青洲』においても、加恵については「加恵は当時における名手莊、否紀の川沿線第一の名豪妹背佐次兵衛の女として青洲より二年遅く宝暦十二年に出生し、厳しい儒教的、武家的訓育を受けて成長し…後略…」などとして記述されていない。さらにその後南圭三⁽⁸⁾らが編纂された『華岡青洲』においても、加恵については「…前略…加恵は宝暦十二年（二七六二）、紀伊国上那賀郡名手莊市場村現和歌山県那賀郡那賀町大字名手市場に生まれた。父は名手莊の豪士妹背佐次兵衛である」と記され、最近の上山英明⁽⁹⁾の著も同様で、呉秀三⁽⁶⁾らの著書の記述を踏襲しているに過ぎない。以上の記載によつては、加恵が妹背佐次兵衛の娘であることは分かるが、妹背家の系譜はどのようになっていのか、加恵の父の佐次兵衛は妹

背家の何代目であるかなどについては一切不詳である。加恵の出た妹背家のあった名手市場は青洲の生地平山からわずかに約七〇〇メートル位しか離れていないにも拘わらず、妹背家についてはこれまで全く調査の手が加えられていなかった。

筆者は、従来殆ど研究されていなかった青洲の妻加恵の系譜について実地に調査し、些かの新知見を得たので以下に報告する。

一、妹背家の系譜

妹背家は、名手市場に居を構えていた。⁽¹⁰⁾享保十四年(一七二九)に妹背家の当主四郎五郎が藩に提出した系図は第1図に示すようになっていた。紀伊国八庄司の一人妹背庄司(名手兵大夫とも称す)の弟の名手新藏人が妹背家の先祖である。以来代々庄屋を勤めた。名手新藏人の四世の子孫左次兵衛は長男であったが、故あって家督を嗣がずに別に一家を構え、三男の四郎五郎が妹背家を相続した。その居宅が現在、那賀町名手市場にある重要文化財の旧名手本陣の妹背家住宅(昭和四四年(一九六九)指



第1図 妹背家系図

定)である。なお本陣は昭和四五年(一九七〇)に史跡にも指定されている。新たに一家を構えた佐次兵衛の家は現在の本陣に向かって右隣りにあったという。現在は他人の手に移り、建物も当時のものではない。なお史料中「佐」と「左」の混同が認められるが、原文のままとする。

二、妹背佐次兵衛家の史料

妹背家の本家を嗣いだ四郎五郎の子孫の方は現存しておられ、その家に伝えられた史料は前述した『那家町史料』¹⁰の中に妹背家文書として収載されている。それによって代々など詳しいことが知られる。しかし分家した妹背家佐次兵衛の直系の御子孫の方が現在どこに居住されているのか不明である。したがってこの佐次兵衛家に関する史料は現在全く入手不可能である。名手本陣の後手に位置する安養寺は佐次兵衛家も含めた妹背家の菩提寺であったが、火災によって過去帳等が一切失われているので、それによっての佐次兵衛家の系譜の調査は全く不可能である。

三、妹背佐次兵衛家の埜域

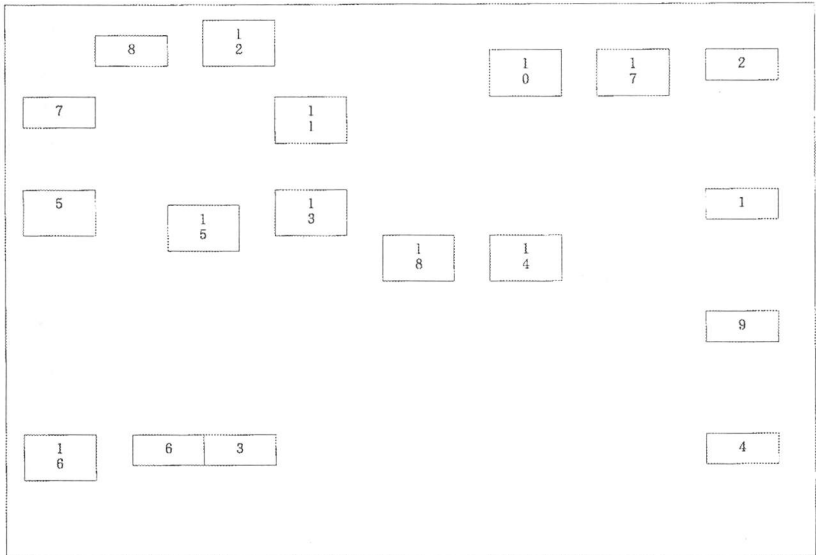
右に述べたような事情で、妹背佐次兵衛家の系譜については墓碑を調べる以外に方法が遺されていない。

那賀町名手市場には、現在佐次兵衛家、佐五兵衛家、四郎五郎家の三つの埜域がある。俗に城山と呼ばれる丘は県道の一・二七号線で分断されたが、平山から名手市場に向かって右手の西側に本家の四郎五郎家の埜域がある。そこには約四十墓の墓碑が二ヶ所に分かれて建立されている。本家の妹背家では安養寺境内に新たに一墓を建立している。丘を下って本陣の妹背家に近く佐五兵衛家の墓碑があるが、現在の当主は血統的にも関係のない方であるという。

さて佐次兵衛家の墓域は、県道で分断された丘の東側(左手)にあり、高さ五〇センチメートルの石垣で囲まれており、



写真1 妹背伝次兵衛家の塋域



第2図 墓碑配置図

間口は四メートル、奥行きは一・七メートル程である。その中に十七墓の墓碑と一つ小灯籠が建立されている（写真1、第2図）。以前墓地が整理されたが、古い墓碑などは処分されていないという。歿年の古い墓碑から記すと次のようになる。なお碑文は碑柱の正面、右側面、左側面の順序に記載し、年号の干支は省略する。

なお（？）はその上の一文字が明瞭に読めず、推定であり、？はその部に何文字かがあることは分かるが、全く解読不能であることを示す。

① 明白重翁居士墓

宝永三年八月七日

妹背佐次兵衛重績

② 妙巖妙性信尼墓

正徳六年三月十三日

妹背佐次兵衛重国（？）妻ヲラム

③ 慈蓮性光信女

享保十四年九月晦日

………元尚俊（？後か）妻

④ 靄山道樹居士

享保十五年正月九日

俗名妹背佐次兵衛利重

⑤ 背誉智安信女

享保十六年正月二十六日

妹背高周妻シヤウ

⑥ 盛陽覚音信女

延享三年三月十八日

妹背佐次兵衛保高妻ヲサヤ

⑦ 玉寿院桂室妙円大姉

重栄妻小博(?)次

天保六年八月?

⑧ 尚賢童子

天保七年六月二十五日

俗名妹背為次良

⑨ 普明院俊哲重義居士

嘉永二年九月十七日

妹背佐次兵衛重義

⑩ 青蓮院慈光妙全大姉

嘉永四年十月十七日

俗名チカ行年四十三歳

⑪ 誘法童子

安政二年正月十九日

妹背重頭子亀太良

⑫ 還蓉童士

文久元年四月二十四日

妹背重頭治男年二歳幾太郎

⑬ 眞如院？大姉

明治十二年五月六日

妹背佐次兵衛重国（？）女シマ行年十八歳

⑭ 修心院證若得道居士

明治二十三年八月十四日

妹背誠一

⑮ 小灯籠 文字なし

⑯ 半分に破損

・？・会信女靈

・？・年二月？

・？・

⑰ ・？・覚・？・居士墓

妹背佐次兵衛？

⑱ 妹背家先祖代々墓

修覚院慈光妙居大姉

俗名妹背カメ

墓碑裏面に「栗生」の二文字

四、墓碑から見た妹背佐次兵衛家の系譜

前項で示した墓碑の刻文を通覧しても、佐次兵衛家の代々を特定することは甚だ困難である。初代の佐次兵衛が家督を弟の四郎五郎に譲って別に一家を構えた正確な年代は明らかではないが、『那賀町史料』中に収められた妹背家の文書¹⁾によれば、少なくとも正徳四年(一七一四)以前であったことが分かる。

そのことを考慮に入れると墓碑の中で歿年が宝永三年(一七〇六)と最も古い①の「明白重翁居士」(写真2)を初代の佐次兵衛と見做しても矛盾はない。そして②の「妙巖妙性信尼」のヲラムが彼の妻であった可能性が高い。「明白重翁居士」は「佐次兵衛重績」と名乗っていたことは墓碑の左側面の文字によって明らかであるが、「明白重翁」の「重」は「重績」の「重」と共通していると思われる。②の左側面の「妹背佐次兵衛重(?)妻ヲラム」「重(?)」は「重績」を考慮すると「重績」かも知れないが、断定的なことは言えない。年代から推定すれば④の「鶴山道樹居士」は二代佐次兵衛と推定される。法名全体の響きに加えて俗名に「利重」と「重」の文字がついていること、初代が歿してから二十四年経っていることがその主な根拠である。しかし⑬の「シマ」の父は「重国(?)」と読んでもまず間違いないと思われる。

③⑤⑥の三人の女性の続柄は全く不詳であるが、俗名から「元尚」、「高周」、「保高」と称した人物がいたことは確実であるが、皆目見当がつかない。③の「慈蓮性光信女」の夫の俗名は「元尚」とあって、その右下に「俊」又は「後」



写真2 佐次兵衛家の初代と目される「明白重翁居士」の墓碑

と読める字があり、左下に「妻」がある。「元尚俊の妻」は少しおかしいので、あるいは「元尚の後妻」の意かも知れない。

—それ以降佐次兵衛家の当主と特定出来るのは、⑨の「普明院俊哲重義居士」と⑭の「修心院證若得道居士」の誠一である。「重義」の息が誠一と目されるが、確証がない。

その他の墓碑の俗名によつて、佐次兵衛家には「重栄」、「重顕」なる人物がいたことは明白であるが、その続柄も全く不明である。⑯の妹背カメは誠一の妻ではないかという。法名の最初の「修」の字が一致し、法名のバランスも取れているからである。

現在「名手本陣」の管理人をしておられる妹背諦氏によれば、右の修一が佐次兵衛家の身代をつぶしたという。そして判然としないが、修一の弟が栄三郎で、栄三郎は一旦他家に養子に出されたが、再び妹背家に呼び戻されたという。栄三郎の後は元吉—広次—諦と続く。諦氏は中学生時代に、祖父の元吉から誠一のことを聞いたことがあるが、誠一と栄三郎の関係については記憶がないという。妹背の名を残すため養家から呼び戻された事実からすれば、修一と栄三郎は親子ではなく、兄弟とした方が妥当であろう。諦氏の家にも系譜に関する史料は一切遺されていない。

五、加恵は何代佐次兵衛の娘か

諦氏の記憶にある妹背家の言い伝えによれば、加恵は三代佐次兵衛の娘であるという。加恵は文政十二年（一八二九）に満六七歳で歿しているから、生年は宝暦十二年（一七六二）である。呉⁶は加恵を宝暦十年（二七六〇）生まれで、文政三年（一八二〇）の歿としているが誤りである。宝暦十二年（一七六二）生まれであるから、どのように考えても享保十五年（一七三〇）に歿した④の佐次兵衛利重の娘ではあり得ない。利重の歿年（一七三〇）とその子孫で当主と思われる嘉永二年（一八四九）に歿した重義の歿年の間は一一九年である。さて江戸中、後期の津輕藩士について一世代当たりの

年数を調べたことがあるが、平均して約三十年弱であった。¹²⁾

そのような計算をすると、三代目佐次兵衛は一七六〇年頃歿、四代目は一七九〇年頃の歿、五代目は一八二〇年頃の歿となり、嘉永二年(一八四九)に歿した「普明院俊哲重義居士」は六代目の佐次兵衛となる。三代目は一七六〇年頃の歿となるから、一七六二年生まれの加恵の父とすれば少し無理があり、むしろ加恵は四代目の佐次兵衛の娘とした方が可能性が高い。加恵は文政十二年(一八二九)に歿しているから、兄と推定される五代目の推定歿年一八二〇年とは矛盾しない。

このように考えると、少なくとも「鶴山道樹居士」と「普明院俊哲重義居士」の間には三人の佐次兵衛が存したことになる。少なくとも加恵が三代目佐次兵衛の娘であるという従来妹背家に伝えられた伝聞は訂正する必要がある。

妹背 諦氏によれば、加恵の同胞は二人で兄がいたという。しかし何の確証もない。従来の研究者もこのことについて全く言及していないし、今回の墓碑の調査によってもこの問題は全く解決出来ない。

結 論

従来全く等閑に付されていた青洲の妻加恵の生家である妹背佐次兵衛家の墓域を实地に調査した。那賀町の俗に城山と称される丘に現存する墓域には計十七墓の墓碑と一墓の小灯籠が存する。初代と二代の墓は大体特定可能であるが、他は続柄不明である。しかし加恵が三代佐次兵衛の娘と従来伝えられていたことは、初代佐次兵衛の独立の年代からも否定出来るのではないかと思われる。

いずれの墓碑も風打雨蝕が著しく、あと数十年も経てば文字の解説も困難になろう。青洲の研究において、加恵を中心とする家族との関わり合いも重要と考えられ、この意味において本稿は些細ではあるが、新知見を提供するものである。

本稿を草するに際して、数度にわたる実地調査で御協力戴いた史跡旧名手本陣管理人の妹背 諦氏に深謝の意を表す。また那賀町教育委員会生涯教育課の伊藤真輝氏にも種々御高配を戴いた。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

- (1) 松木明知 「大麻とケシの文化史―麻沸散の謎―」『日経メディカル』三四号、三八〜四〇頁、一九九六
- (2) 松木明知 「近代麻酔科学を創った華岡青洲―痛みとの闘いの歩み―」『日経メディカル』二五六号、一一〇〜一二三頁、一九九三
- (3) 松木明知 「地藏寺過去帳による華岡青洲の乳癌手術患者三名の死亡年月日」『日本医史学雑誌』四四巻四号、四九九〜五〇七頁、平成十年
- (4) 松木明知 「講御堂過去帳による藍屋家の系譜的研究」『日本医史学雑誌』四三巻四号、四一五〜四二二頁、平成九年
- (5) 松木明知 「地藏寺過去帳による華岡青洲の系譜に関する新知見」『日本医史学雑誌』四五巻一号、四五〜七五頁、平成十一年
- (6) 吳 秀三 『華岡青洲先生及其外科』五二頁、吐鳳堂、東京、大正十二年
- (7) 森 慶三 市原 硬、竹林 弘 『医聖華岡青洲』十七頁、医聖華岡青洲顕彰会、和歌山市、昭和三九年
- (8) 南 圭三 『華岡青洲』六八〜六九頁、那賀町華岡青洲をたたえる会、那賀町、昭和四七年
- (9) 上山英明 『華岡青洲先生―その業績とひととなり―』一二頁、医聖華岡青洲顕彰会、那賀町、平成十一年
- (10) 南 圭三 『那賀町史料』二九〇頁、那賀町教育委員会、那賀町、昭和四五年
- (11) 前掲(10)の二七五〜二七六頁 妹背家文書「諸事御用務方并重而為見合留帳」の中に次の記述がある。

覚

一、私妹背之惣領ニテ御座候哉。妹背家惣領之品書付差上候様ニト被仰付候。惣領ハ左次兵衛ニテ御座候処、新宅ヲ造り相渡、私儀ハ本家ヲ相続仕来申候、且又御宿数代相務申候

午六月

小山田庄助様

伴庭伝七様

右正徳四年六月七日上ル

- (12) 松木明知、花田要一編『津軽医事文化史料集成』二一九―一七九頁、第八六回日本医史学会、東京、一九八六 この中に収載した「江戸御家中明細帳」に現われた初代と末代の死亡年月日から一代当りの年数を求めた。

(弘前大学医学部麻酔科)

The Genealogy and Graveyard of Sajibei Imose's Family in Relation to Seishu Hanaoka's Wife Ka-e

Akitomo MATSUKI, M.D.

No study has been done on the genealogy of the family of Seishu Hanaoka's wife Ka-e. She was from the Sajibei branch of the Imoses of Nate Ichiba, Naka town. No direct descendents from the branch could be tracked down and the burial records of the family had been lost in a fire at their family temple An-yo-ji. Therefore I made a field survey of the family's graveyard at Nate-Ichiba, located at a hill called Shiroyama, only seven hundred meter south of the birth place

of Seishu Hanaoka. There are three graveyards of the Imoses and that of the Sajibei branch is at the east side of the hill. A total number of seventeen tombs and a small stone lantern are found and most of the inscribed words are difficult to decipher because of long exposure to the weather.

The oldest tomb of “Meihaku Ju-o Koji” is for Sajibei Imose, who died on August 7 th, 1706 and is presumed to be the first Sajibei of the family. A gentleman named “Toshi-shige” who passed away on January 9, 1730 would be the second Sajibei. The remaining fifteen family members are difficult to identify, particularly in relation to other members.

According to an Imose family tradition, Ka-e was regarded as the daughter of the third Sajibei for a long time, however, there is no definite proof to clarify this according to this survey. The tombs have been heavily damaged by weather and inscriptions on the stones would have worn away within several decades. In this sense this paper has significance.